

第62回試験研究成果発表会

(ビワ産地の早期復旧・復興及び継続・発展を目指した技術の開発) 発表概要

【日 時】 令和7年2月7日(金) 13:00 ~ 15:50

【場 所】 農林総合研究センター暖地園芸研究所大会議室(館山市山本1762)

発表1 成果発表

ビワ「大房」及び「田中」の幼果の耐寒性

特産果樹研究室 椎木 千晴

千葉県はビワの経済栽培の北限であり、毎年、厳寒期の気温低下による寒害の発生が懸念されます。主要品種の「大房」は比較的寒害に強いと言われています。そこで、過去22年間の生育調査の結果を解析するとともに、恒温器内で低温試験を行い、「大房」や「田中」が寒害を受ける生育ステージや、温度条件を明らかにしました。



寒害で胚(種子)が凍死した幼果



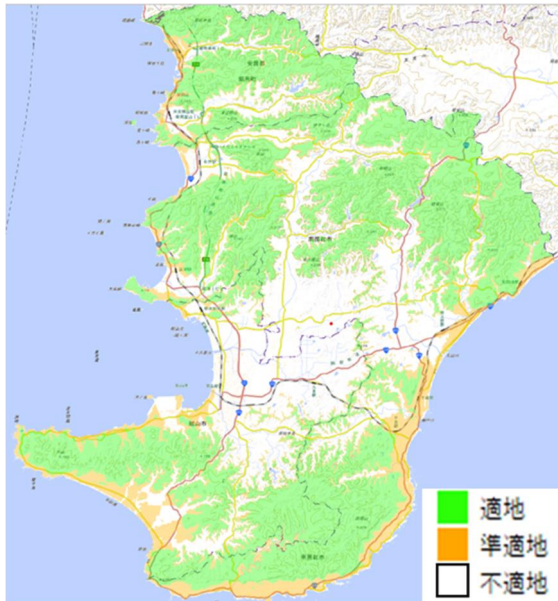
寒害を受ける幼果のステージ(開花後35日)

発表2 成果発表

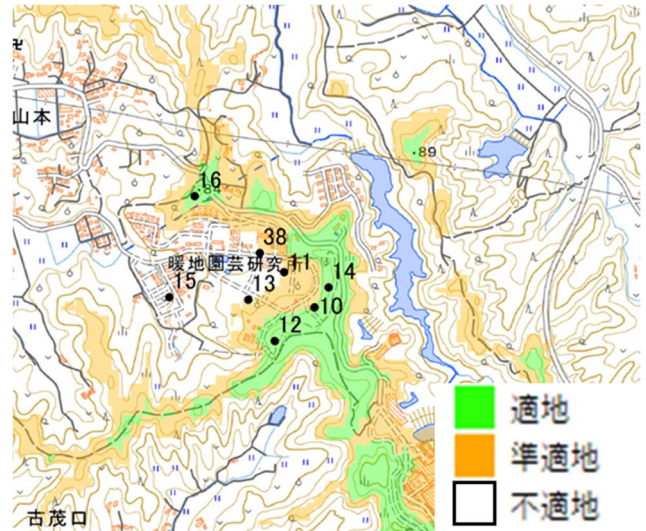
ビワ「大房」の栽培適地判定マップの開発

特産果樹研究室 横山 瑛

近年の暖冬傾向により寒害発生リスクが低くなることが予想され、産地ではビワ栽培を従来の急傾斜地から、作業性の良い平坦地に拡大することが期待されています。そこで、南房総地域の気温や寒害の現地調査を行いました。これらの結果を解析し、寒害をもたらす低温に遭う頻度が低い「適地」や頻度が高い「不適地」をマップにして示しました。ビワが成木になる将来の気温上昇を見込むと、「適地」や「準適地」の拡大が見込まれます。



作成したビワ栽培適地判定マップ



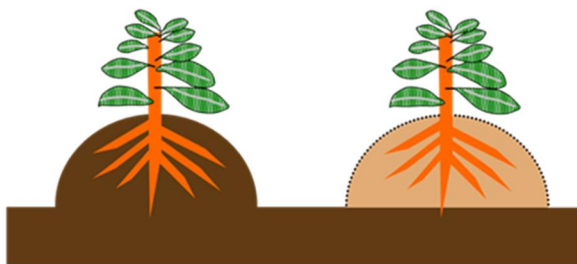
拡大（館山市山本）

発表3 成果発表

ビワの改植時における盛土式客土法の開発

特産果樹研究室 中後 貴寛

ビワ産地では経済樹齢を超えた樹を更新するために改植が行われていますが、連作圃場では新たに植えた苗木に生育不良がみられることが少なくありません。そこで、植え付け時に行う盛土部分の土（70L）を新土で客土する盛土式客土法を開発しました。この方法により植えた苗木は、無客土（連作土で盛土）に比べて、初期生育が進み初期収量が多くなります。市販の赤玉土や赤土を盛土に使用して5年栽培した結果も報告します。



盛土客土法のイメージ図
(左：連作土、右：新土)



盛土式客土法による苗木の定植

発表4 成果発表

改植時から取り組むビワ白紋羽病の防除体系

生産環境研究室 鐘ヶ江良彦

ビワ白紋羽病は、樹を衰弱・枯死させるため、ビワの最も重要な病害の一つですが、園地の改植の際に新たに植え付けた苗についても、生育不良や枯死を引き起こしています。その対策としては、残根を丁寧に除去したうえで、植え付け予定地を高温水処理で殺菌する、定植時にフルアジナム水和剤を灌注処理するといった対策が有効です。さらに、2～3年間隔で追加処理を行って再発を防止できます。試験データに基づいて、防除体系を解説します。



定植前の高温水処理



定植時のフルアジナム水和剤灌注処理

発表5 成果発表

台風等の被害により樹勢が低下したビワの回復方法

特産果樹研究室 中後 貴寛

台風被害で樹勢が低下したビワ樹を回復させるため、現地の樹を用いて、摘房による着果負担の軽減や、株元のマルチ被覆の効果を調査しました。また、根域へのヤシ殻繊維資材の施用による根部や樹体の生育促進効果を明らかにしました。これらの結果を紹介します。



樹勢が低下した樹へのマルチ処理



ヤシ殻繊維資材施用の様子

発表6 情報提供

強風対策と省力化に向けたビワの低樹高化

特産果樹研究室 横山 瑛

強風に強く、樹に登らずに袋かけや収穫などを行える低樹高栽培が求められています。そこで、樹を2本主枝Y字形に仕立てる低樹高化を検討しました。主枝を支柱に誘引することで、樹高は2m程度に抑えられます。また、低樹高栽培に適した大苗を育成するためのポット育苗法や、低い位置から新梢のもとになる不定芽を発生させる誘引法について紹介します。



2本主枝仕立て直後の様子
(令和5年3月)



2本主枝仕立て21か月後の様子
(令和6年11月)